

# 小唄お政

野村胡堂

一

「八、大層手前てめえは意気になつたな」

「からかつちやいけません、親分」

八五郎のガラツ八は、あわてて、膝小僧を隠しました。柄がらにな

い狭い単衣、尻をまくるには便利ですが、真面目に坐り直すと、

帆立ほったて尻じりにならなければ、どう工面をしても膝小僧がハミ出しま

す。

「隠すな、八、ネタはちゃんと拳がつてるぜ」

銭形平次は構わずに続けました。

「へッ、へッ、どの口のネタで？」

「いやな野郎だな、顎あごなんか撫でて、——近頃てめえ手前、遠吠とおほえの稽古をするってえ話じゃないか」

「遠吠は情けねえ。誰がそんな事を親分にいい付けたんで」  
ガラッ八は少しばかり意気込みました。

「手前の伯母さんだよ。——今朝お勝手口へ顔を出して、お静に愚痴ぐちを聞かせていたぜ——酒や女の道楽と違って、若い者の稽古けいこ所入りじょが悪いではありませんが、家へ帰って来て唸うなられると気が

滅入ります。糠味噌ぬかみその蓋ふたに仔細はございませんが、あんな調子つ外れの遠吠を聞かされたら、どんな気の強い娘も寄りつかないだろうと思うと、可哀想でなりません。御存じの通り、あれはまだ独り者ですから——だとさ。どうだい八、伯母さんは苦勞人だろう。あんまり心配さしぢやならねえよ」

「チエツ、憚はばかりながら娘っ子除けの禁呪まじないに小唄をやっているんだ。心配して貰いたくねえ」

ガラツ八はそう言いながらも、耳の後ろをポリポリ搔いております。

「そうだろうとも、だから俺は言っつてやってよ。——伯母さんの

若い時と違って、この節はあんなのが流行はやるんだ——ってね、小唄一つ歌うんだって、鼻っ先や喉で転がすんじゃないやねえ。八の野郎は胆っ玉で歌うに違えねえ。——」

銭形平次に悪気があるわけではなかったのですが、伯母の口吻こうぶんから察して、ガラツ八の八五郎が小唄の師匠に気がありそうにも取れたので、それとはなしに脈を引いて、意見をするものなら、今のうちに意見をしようと思ったのです。

「親分、本当のことを言うと、こいつにはワケがありますよ」

「そうだろうとも。二日も行かなきゃ、師匠ししょうの小唄お政が、迎えをよこす程だって言うから、ワケだって大ありだろうよ」

「嫌だね。伯母さんが、そんな事までブチまけたんですかい」  
「人に意見などをする歳じゃねえが、小唄お政じゃお職過ぎる。  
止す方が無事だぜ、八」

錢形平次はようやく真顔を取戻しました。からかったり、ふざけたり、叱つたりするうちにも、子分の八五郎を思う真情が、行きわたらぬ隈なき心持だったのです。もつとも、親分子分といつても、歳から言えば、幾つも違わない二人です。時々真剣さが顔を出してくれなければ、際限もなく洒落しゃれのめして、隔へだても見境いもなくなりそうな仲でもあったのでした。

「それは心得ていますよ、親分。芝居小唄の千之介、六郎兵衛は

ともかく、江戸じゃ、お寿ひさとお政は女師匠の両大関だ。吉原から浅草一円、柳橋へかけての弟子だけでも、千人ずつはあると言われるお政が、下っ引のあつしなんかには、洩はなも引っかける道理はありませんがね」

八五郎の話は妙に筋が通ります。

「――」

平次はうさんな顔を挙げました。伯母から聞くと、馬道のお政の稽古所へ、日参しているほど取上のほ気せた八五郎に、こんな分別があるうとは思われなかったのです。

「仔細しさいあつて命が危ない、――お願いだから、毎日来て見てくれ

——つて言うんで、まさか十手を懐中に突っ張らかして稽古所を見張ってるわけには行かねえ。親分の前だが、この八五郎も馬鹿になつたつもりで、毎日馬道に通つちや、精一杯のドラ声を張り上げてゐるんですぜ、へッ」

八五郎はこう言つて変なところに苦笑を漏もらしました。こうは言いきつたものの、少しは後ろめたさもあつたのでしよう。

「そうかい、そいつは知らなかつた。お政の顔を見ながら、間の抜けた小唄なんか唸うなつて、実は大望があつたわけだね。いや、恐れ入つたよ、八」

「親分、まだ、そんな事を」

「だから、その大望を聞こうじゃないか。江戸二人師匠と言われた小唄お政が、命にかかわるほど思い詰めたなら、さぞ口舌くぜつにも節が付くだろう」

平次はまだ本気にはなりきっていない様子です。

「だがね親分、お政が二度も殺されかけているんですぜ」  
「何だと？」

話はそれでも、次第に軌道に乗って行きます。

二



その頃は隆達りゆうたつ小唄や、平九節ひらく小唄の勃興期ぼっこうきで、江戸にもようや

く名人と言われた女師匠が現われるようになっていました。

山谷のお寿さんや ひさと、馬道のお政は、その中でも有名で、どららも若

く、どちらも美しく、芸妓、素人の隔へだてなく、男弟子も、女弟子

も取って、多勢の狼連おおかみれんと、少数の有力な旦那衆バトロンに取巻かれ、少な

くとも表面だけは、派手で陽気で、この上もなく結構な暮しをし  
ているのでした。

二人の間には、自然に競争が起りました。同じ芸道にいそしむ

仲で、他所眼よそめには、至極うち解けて見えましたが、腹の中では鎬しのぎ

を削り合って、一人でも弟子を多くし、少しでも評判をよくしよ

うと言った、両雄並び立たぬ心持でいたに相違ありません。

その間の消息を八五郎はこう説明するのです。

「お政は打ち明けてお寿のせいとは言やしません、去年の暮には、大さらいの晩、危うく水銀を吞みずがねまされるところを、弟子の浜名屋又次郎さんに助けられ、今年の夏は涼船から突き落されたのを、船頭に引上げられたと言いますぜ」

「なるほど、そいつは物騒だ。——それで、用心棒の代りに手前てめえを呼んで、伯母さん困らせな小唄を仕込んでいると言ったわけか」

「早く言えばそうなんで」

「気取って遅くなんか言うから解らなくなるじゃないか」

平次もここまで聞かされると、江戸名物の小唄お政の命が心配になります。

「親分、お政は可哀想じゃありませんか。こうしているうちにも、どこから、どんな術てで相手が来るか毎日ビクビクもので暮していますよ」

「お政の命を狙うのは——まさか、お寿じゃあるまい」  
平次はまたこんな事を言うのでした。

若くて美しくて、ともすれば、先輩のお政の人気を奪いそうにするお寿は当面の仮想敵かそうてきには相違ありませんが、この市井しせいの芸術家お寿の、なよなよとした夕顔のような淋しい美しさと気品のあ

る芸を知っているだけに、平次も急には疑う気にならなかつたのです。

「大さらいの時は、お政とお寿がいつしよでしたよ。お政がひとくさり歌つて、薄暗い楽屋へ歸つて、湯呑の湯を呑もうとすると、そこにいたはまなや浜名屋の次男坊の又次郎が、師匠の手を押えて止めたそうです。——その湯は変だから、止す方がいいって——」

「——」

「縁側へ持つて行つて見ると、中にはギラギラと水銀が沈んでいみずがねるんだそうじゃありませんか。懐中鏡の裏の紙を剥はがして、その水銀を湯呑へ入れたに違いありません。ところでギヤマンのオランダ和蘭

かがみ

鏡を持ってゐる者は、そこにはたつた二人しかいなかったと言います。一人はお政で、一人はお寿ひさ——お政は自分の湯呑へ自分の鏡の水銀みずがねを入れる筈はありません」

「——」

平次は大ききうなずきました。

硝子製の鏡は非常に珍しい時代ですから、水銀の貼り方も至つて粗末で今日のようにエナメルで固めたものでなく、鏡の裏へ紙に延して当て、僅かに枠わくで押えたものだったのです。今の医学ではあまり信じられませんが、——水銀を吞めば、声が潰つぶれると一般に信じた時代、小唄の師匠に致命的な打撃を与えるためには、

そんな事をする者もあつたのでしよう。

「大さらいの場所は？」

「山谷の清松きよまつの二階を打ぶつこ抜いたそうですよ」

「それから、涼船の一件は？」

平次の探求欲は活潑に働き始めました。

「この時もお寿といつしよで、——お蔵前の山口屋が、二人を伴  
れて柳橋から船を出しました。両国の下へ舫もやって、歌う、飲む、  
踊るの大騒ぎです」

「手前もいつしよかい」

「とんでもない。岡つ引きがいつしよだった日にや、灘なだの生一本

が、大川の水みたいになる」

「大層物事に遠慮するんだね」

「とにかく、さんざん騒いだ揚句、無理強いの酒が廻って苦しくてたまらないから、お寿を誘さそって、お政は舳みよしへ出たそうです」

「お政の方が誘ったんだね」

「おかしいのはそこだけですが、誘われたお寿がはつきり言うんだから嘘じゃないでしょう。お政は何とも言いません、が、舳で風に吹かれていますうちに、川へ落っこった事だけは確かです」

「落っこったのか、お政が？」

「それもお寿の言い草で、——多分酔った顔を風に吹かれて目が

廻ったんだらう。お政さんはフラフラッとすると、真つ黒な水の中へ落ちた——とこうなんだそうですよ。もつとも、お政に言わせると、呑んだと言つても、川へ落ちるほど酔つてはいなかつた。好い心持で夜風に吹かれていると、いきなり後ろからドンと突かれたような気がする——とこうです」

「そこにはお寿とお政の外には誰もいなかったのかい」

「山口屋と取巻きの連中は屋根の下で、お爛番かんぼんと船頭はとも艦かみでさ」

「成程な」

「お寿はあんまりびっくりして声も出なかつた。ア、ア、と言ううちに、五六間流されたお政が、幸い通り掛かつた他の涼船の船



頭に引上げられて、散々水は呑んだが、命だけは助かったそうですよ」

「それは危ないな、お政は水心がなかつたのか」

「小唄の師匠が泳ぎを知っているわけはありません。もつとも、突き落とされると、前もつて解つておれば、泳ぎの稽古位はしたかも知れませんが——」

「皮肉を言うな、八」

「ところで親分、これがあべこべだと話になりませんよ。お寿はつくだ佃で育つて、あんなきゃしゃ華奢に見えるくせに、泳ぎは河童のかっぱ雌めすほどどうまいそうですよ」

「河童に雌があるのかい」

「雄おすがありや雌だつてありますよ」

無駄は入りますが、ガラツ八の話は次第に面白くなります。

「それから、八五郎さんの弟子入りとなつて、一日顔を見せな  
きゃア、呼出しが来ると言うわけか」

「へッ」

「満更じゃねえな、八。小唄お政に呼出しをかけられるのは、一  
千人という弟子の中でも、手前てめえ一人だろう」

「まだありますよ」

「誰だ」

「浜名屋の冷飯食いで——」  
ひやめしく

「又次郎か」

「それから山口屋の旦那」

「大層氣が多いんだな、それがお政の情夫いろと旦那か」

「だからあつしなんか、本当の用心棒で」

「氣が弱いじゃないか、——今日もこれから行くんだろう」

「へッ、行かなきゃア、又呼出しだ」

八五郎は少しばかり脂やにさが下りました。

「厭な野郎だな——まあいい、お政に逢つたら、そう言ってくれ。

平次も弟子入りをしたいが、どうだろう、今日明日はいけませんが、

あさって  
明後日あたり行つて見るから——つて」

「本当ですかい、親分、それは」

ガラツ八の鼻の下は長くなりました。

「誰が嘘を言うものか、放つて置くと、大變な事が起りそうだ。用事が一応片付いたら、きつと行つて、この平次が見張つてやる。口幅つたい言い草だが、大船に乗つたつもりで待つているようにつて言うんだよ」

「驚いたな」

ガラツ八は呆氣あっけに取られました。大きな口を利くのを、馬鹿み

たいに思つている平次が、こんな自惚うぬぼれきつた事を言う真意が呑

込み兼ねたのです。

三

「大變ッ、親分」

ガラツ八は、翌る日の晩、鉄砲玉のように飛込んで来ました。

「何が始まったんだ。相変らず騒々しい」

平次はそう言いながらも、充分期待していたらしい顔を挙げたのです。

小唄お政

「お政がやられましたよ、親分」

「引搔かれるか、髪でも捲むしられたんだろう」

「それどころじゃねえ、親分——あ苦しい、浅草からここまで駆けて来たら、物が言えねえ」

「馬鹿、それだけ口が立ちや沢山だ、早く言ってしまったいな——まさかお政が殺されたんじゃないやあるまいな」

「殺されましたよ」

「何だと」

「この眼で見て来たんだ。間違いつこはねえ、もう三輪みのわの万七親

分がやって来て、お寿ひさを調べていますぜ——あんなにお政に頼ま

れたのに、少しの油断でやられましたよ。三輪の親分に下手人を

挙げられちゃ、この八五郎の男が立たねえ、親分、お願いだから行って見て下さい」

八五郎はもう、錢形の袖を引いて、力づくでも引張り出そうと  
しているのです。

「三輪の兄哥の縄張だ。そいつは御免蒙ごうむろうよ、八」

「親分、それじゃお政が可哀想だ。いえ、この八五郎が可哀想じゃ  
ありませんか。あんなに頼まれた癖くせに、指をくわえて引込んじゃ」  
「よしよしお前には敵かたわねえ。——とにかくちよいとだけでも覗  
いておこう。この殺しは一風変っていそうだ」

何を考えたか平次は、思いの外気軽に支度をする、八五郎と

いっしょに、浅草へ急ぎました。

「お政の家なら馬道じゃないか」

馬道を横に見て新鳥越しんとりごえの方へ行こうとするガラツ八を呼止めました。

「それが不思議なんで、——お政は昼過ぎから山谷のお寿のところへ行つて、珍しく油を売り、薄暗くなつてから、お寿に送られて新鳥越まで来て、正法寺しょうほうじの前で別れたんだそうですが、これはお寿の言い分ですよ、親分」

「——」

「その正法寺前の路地で、血だらけになつて死んでいたんです」



「誰が見つけたんだ」

ちようちん

「提灯を持って迎いに行つた権助が、新鳥越の路地に人立ちがあるんで、何の気もなしに覗いて見ると、師匠のお政が殺されてい  
るんだそうじゃありませんか。町役人に届けて、あわてて歸つた  
ので、馬道にいた弟子が二三人、宙を飛んで行つて見ました」

ちゆう

「誰と誰だ」

「あつしと浜名屋の又次郎と、権助と、染物屋そめものやの勘次と、——そ  
んなものでしたよ」

お政 小唄  
そんな話をしながら、平次とガラツ八が現場へ駆けつけた時は  
宜い塩梅に検屍が済まないのので、路地の死体もそのまま、番太の

老爺が立番をして、町内の弥次馬が、怖い物見たさの遠巻きに、月の光にすかしております。

「筵むしろを取って見な、八」

「へエ——」

死体に掛けた筵を取ると、番太は心得て提灯を差出しました。

「あッ、これはひどい、——何という虐むじたらしい事をしたんだ」  
平次が言ったのも無理はありません。

月の光に蒼ずんだお政の死顔は、全く思っても見ない痛々しいものだったのです。

何分にも凄まじい血です。

晴着らしい単衣ひとえの胸から腰まで蘇芳すおうを浴びたようになって、左顎の下へ、斜に開いた瘡口きずぐちは、それほど大きいものではありませんが、ようやく脂の乗ってきた豊満な大年増の顔は、蠟ろうのように蒼ざめて、月の光と、提灯のあかりの中に、言いようもない不思議なニュアンスを醸かもし出しております。

美女の死体の凄まじさに、平次もさすがに躊躇ためらいましたが、しばらくすると、番太の提灯をガラツ八に差出させ、馴れた順序で、髪形から、着物の崩れ、手足の投げ出された方向から、血の流れよう、傷口の模様まで、恐ろしく念入りに調べ始めました。

「八、何か掴んでいるようだ。左の手を開けてみな」

「へエ——」

八五郎はお政の死体の冷たい掌てを開けました。

「ありましたよ、親分」

「何だ」

「毛」

「どれどれ」

ガラツ八のつまみ上げたのを見ると、紛まぎれもなくそれは女の髪  
の毛です。懐紙を出して、その上へ置くと、長短不揃ちぢいなのが三  
本、いずれも少し赤くて、縮ちぢれているのがはっきり判ります。

お政お唄小

「お寿ひさの毛ですよ、親分」

「判っているよ」

美女お寿は、類稀たぐいまれな姿と顔形に恵まれながら、何の因果か赤くて縮れた毛を持っているので有名だったので。



©2017 萩 柚月

四

「刃物は？」

平次は四方あたりを見廻しました。こんな場合、よつほど落着いた悪党でないと、大概血だらけな刃物は捨てて行くものです。

「三輪の親分も捜しましたが、見当りませんよ」

番太の老爺はそう言います。

「八、念入りに捜して見てくれ。下水の中でなきや、堀へいの中だ」

「よしきた」

八五郎は番太の提灯を借りると、いきなり下水の中へ首を突っ込みました。

「かき廻しちや何にもならない。下水を念入りに捜すのは明朝の事にして、堀の中を見るんだ」

「へエ——」

がしかし、それも無駄でした。

「八、あれは何だ」

しばらくすると、平次は月の光に白々と見える、右手の長屋の板庇いたびさしの上を指しました。

「光るようですね、親分」



「梯子はしごを借りて見てくれ、雨が降った筈はないし、——庇ひさしの上の光るのは変だ」

平次に言われるまでもありません。八五郎は気軽に梯子を借り出して、庇へ掛けると、筒抜けに驚きの声をあげます。

「親分、見つかりましたよ——血だらけの剃刀かみそり」

「有難い、それで何もかも揃った」

柄えに籐とうを巻いた、使い古しの剃刀を受取ると、平次は雀躍こおどりしたい心持になるのです。

「親分、番所へ行って見ましようか」

「待ってくれ、ここにいるなら、お政の弟子たちに一と通り会っ

て行きたい」

「駆けつけた顔は大概揃っていますよ。権助どん」

「へエ——」

ガラツ八の声に応じてノソリと出たのは、お政の使っている飯めし炊き、庭も掃はけば使い走りもすると聞いた、調法至極な男です。

見たところ五十幾つ、形振なりぶり構わず小金を溜めるより外に望みのない人間で、信州の土の匂いのすると言った風格には、お政を殺す動機などを持っていそうもありません。

「それから、又次郎さん」

「へエ——」

浜名屋の冷飯食い、飛抜けた道楽者で、親兄弟も構いつけない代り、女の子の達引たてひきには不自由をしない男、二十七八の若い燕型つばめがた、これは一番疑われそうな人間です。

「師匠が殺された時分、どこにいなすつた」と平次。

「馬道ななつに申刻時分から先刻まで、師匠の帰りを待っていましたよ。八五郎さんもよく御存じで——」

又次郎は少しおどおどしておりますが、大して悪びれた色もありません。

「又次郎さんの言うのは違いありませんよ、親分、ざるこ箆碁こを打って

いたんで」

「中座しなかつたかい」

「ちよいと、煙草を買いに行きましたが――」

言いかけて又次郎は口を緘つぐみました。馬道からここまでは一と走りです。煙草を買うことにして、人一人殺しに來られない筈はありません。

「煙草入は？」

「――」

黙って平次に渡した煙草入を開けると、印伝いんでんの吠かますには一パイ新しい刻みが詰っております。

平次はそれを又次郎に返すと、もう一人染物屋の勘次と言うのに会いました。これは又次郎よりは少し若く、夕方からガラツ八の相手をして、馬道から一步も出なかつたことが判りました。

「さア行こうか、八」

平次はそこをきり上げて、山谷の方へ向いました。

「又次郎が怪しくはありませんか、親分」

それを追っかけてささやく八五郎。

「何とも言えない。が、万事はお寿ひさに逢つてからの事だ。——そ

れとも、又次郎はお政を怨んでもいたのか」

「そんな事はありませんが、お政が近ごろ旦那の山口屋の機嫌を

取り過ぎるんで、又次郎も面白くない様子でしたよ。もつとも、山口屋も浮気で、お政に飽きて、山谷のお寿のところへしげしげ繁々行くようになったそうですから、お政にしてみれば、冷飯食いの又次郎の機嫌などを取っちゃいられなかつたでしょう」

ガラツ八の話聞きながら、平次は何やら深々と考えております。

## 五

番所へ行って見ると、三輪の万七とおかぐら神楽の清吉が、おひさ寿の責

めおおわらわに大童でした。

「おや、銭形の、大層耳が早いんだね」

万七は顔を上げて、皮肉と敵意とをこね混ぜたような、薄笑いを浮かべました。

「お政は八五郎の師匠だそうでね、放ってもおけないから覗いただけさ。ところで下手人の当りは？」

平次は穏やかにこう言うのです。

「この女さ、間違いつこはねえ、が——旦那方が見えるまでに、口を開けさせなきや後が面倒だ」

万七はそう言いながら、板敷の上に崩折れた、小唄お寿の痛々

しい姿を指さしました。

まだ二十五六、お政よりは六つ七つ若いでしょう。ちよつと見は二十二三が精々、色白で、きやしや華奢で、なよなよとした陰影の多い美しさは、豊満で肉感的で、少し媚態をびたいさえ持ったお政とは、およそ正反対な感じのする女でした。

うすもの羅物を涼しく着て、もろて板敷に双手を突いた姿、縮れた赤い毛をたった一つ難にして、このまま、中条姫や、照手姫の絵巻物の中に納められそうな姿です。

「お寿が下手人？ 一応俺もそう思ったが、腑に落ちないこともあるよ、三輪の」



平次は下手したてに出ました。

「お政の死骸の手に、縮れつ毛が握ってあつた筈だ。五六本のうち、二本だけは検屍の御役人にお目にかけるつもりで残して置いたが、銭形あにいの兄哥あにいがあれを見落す筈はあるめえ」

万七は顧かえりみてお神楽の清吉とうなずき合います。

「これかい、三輪の」

平次は素直に懐ろ紙に包んだ毛を出しました。

「その毛に気がつきや文句はあるめえ。それにお政は、清松の大さらいで水銀みずがねを吞くまされ損そこなつたことも、涼船から突き落されたことも、銭形兄哥は聞いている筈だ」

「――」

「お政の喉のどの傷は薄刃の刃物で斬られたに違げえねえ。多分かみそり剃刀  
だろう。剃刀なら女でもあれ位のこととは出来るぜ。――清吉を  
やって、お寿の家中を捜させたが、けさ妹のお文が使ったという、  
一番よく切れる剃刀がなくなっているぜ、――多分お寿がお政を  
送って行くとき持出し、新鳥越の路地で使って、血だらけになっ  
たのをどこかへ捨てたんだろう――その剃刀さえ見つければ、口  
書きほいん拇印おしおきだいがなくなつて、処刑台に上げられる女だ」

万七の言うのは、常識的で無理のない推理でした。

「その剃刀は多分これだろう」

平次は何の蟠わだかまりもなく、血染の剃刀を出しました。

「あッ、どこで、それを」

「現場近くひきしの庇の上に投げ上げてあったよ」

「そうか、下ばかり捜していたが——」

万七は忌々しそうに舌打ちをします。

「お寿、——この剃刀に見覚えがあるだろう。正直に言ってくれ」と平次。

「——」

一と目、お寿はサツと顔色を変えました。血に染んで斑々はんはんとしてはありますが、柄に巻いた籐や、使い込んだ刃の減りに、見違

えようはなかつたのです。

「どうだ」

「ハ、ハイ、——どうしてそんな所へ行つたんでしよう」

「お寿の品に相違あるまいな」

「ハイ」

これはお寿に取つては罪の白状も同じことでした。それを聞く万七はもう袖の中の捕縄をまさぐつております。

「錢形の、お蔭でこの女の口を開けさせたよ。剃刀が出さえすれば、こつちのものだ」

お政お唄小

「待ってくれ、三輪の兄哥、——お寿の家から剃刀を盗み出せる

曲者なら、鏡台の抽斗ひきだしか屑籠から抜け毛を持出すのは何でもない

ぜ」

「何だと、銭形の」

万七は仰天しました。平次の言葉があまりにも変っていたので  
す。

「三輪の兄哥、——気がつかない筈はないが、この毛は皆な古い  
抜け毛だと思うが——」

「えッ」

「根のある毛が一本もないし、両端が細くなつて枯れているところを見ると、切れた毛やむし捲り取った毛でもない」

「下手人はお寿の家から抜け毛と剃刀を盗み出し、お政を殺してからわざと掴ませたというのかい」

と万七。

「それでも考えなければなるまいよ」

「ところが、今日は稽古が休みだ。お寿の家へ行った者は一人もありませんぜ」

お神樂かぐらの清吉は口を出しました。

「本当か、お寿」

と平次。

「」

お寿は悲しくもうなずきません。

「朝まで確かにあつた剃刀が、誰も怪しい者の行かないお寿の家から飛出して、血染めになつて、新鳥越の路地のひさし庇の上に——梯子を掛けなきや届かないところに投げ上げてあつたのはどういふわけでしょう、銭形の親分」

清吉の調子は存分に皮肉です。

「だが清吉あにい兄哥、お政の傷は前から斬つたものじゃねえ。お寿のような華奢な女に剃刀で前から切られるのを待っているお政でもなからうし、第一あんなに前から切っちゃ、返り血を浴びて大變だ」

「――」

平次は板敷に崩折れたままのお寿の清らかにさえ見える姿を見やりました。どこを捜しても、血の痕などはありません。

「後ろへ廻って、みぎさかて右逆手で切ると、あんな具合になるが、後ろか

ら斬られながら、お政の手はどう伸びて下手人の髪を掴むんだ」

平次は仕方ばなし噤になりました。なるほど、後ろから逆手に持った

剃刀で喉を切られながら、相手の髪を掴めようはありません。

「なるほど、こいつはむずかしい」

ガラッ八もやってみましたが、どうもうまく行きそうもないのです。



「だいぶ面白そうだな」

そこへ顔を出したのは、見廻り同心の南沢鉄之進でした。

「旦那、ちようどいいところへ」

平次と万七は迎え入れて、今までの経過を細々と説明します。こまこま

「なるほどどつちにも理屈はある。が、こう証拠が揃っちゃ、お寿を許すわけにも行くまい。ともかく、南の御役所へ伴れて行って、平次にはもう一と働きして貰うことだ」

南沢鉄之進はそう言いながら清吉を顧みかえりました。お寿に縄を打てというのでしよう。

## 六

平次はその足ですぐお寿の家へ行きました。妹のお文と内弟子が三人、下女が一人、更くる夜を寝もやらず、不安と疑<sup>ぎ</sup>惧<sup>ぐ</sup>とに顫えていたのです。

「銭形の親分さん、どうぞ、お願い、——姉を助けて下さい、人なんか殺せるような姉じゃございません」

飛んで出たのは、妹のお文でしょう。丸々と肥った十八九の娘、姉のお寿とはちがって、激情的で一本調子で、その代り少しお転婆です。

「それはよく解っているよ。助けようと思えばこそやって来たんだ、——隠さずに教えてくれ。第一番に訊きたいのは、今日は本当に誰も来なかったのか」

と平次。

「お稽古の休みは、なるべく人に来て貰わないようにしています。姉はあの通り、身体も心持も弱い人で、時々は一日のんびりと休ませなきゃなりません」

とお文。

「お政が来た筈じゃないか」

「でも、それは勘定に入らないでしょう。殺された人ですもの」

「なるほど、そう言えばその通りだ」

平次は苦笑しました。その謎めいた言葉の真意は誰にも解りません。なぞ

「剃刀が今朝まで鏡台にあつた——とお神楽の親分に申上げたのは、ありや間違いですよ。この二三日、誰も使つた者がありません。今朝私が使つたのは、なくなつた方のだと思つたのは間違いで、新しい籐も何にも巻かない剃刀の方でしたよ、親分さん」

お文は一生懸命でした。姉思いらしい一途さは、涙ぐんだ眼、わななく唇にも溢れます。

「それがいけないよ、——そんな拵え事を言うから、お寿が疑わ

れるんだ。物事はありのままに言うに限る。なくなつた剃刀が今朝まで使っていた品なら、それでいいじゃないか。下手人はどうせ巧みに企んだ仕事だ。皆なの思いも寄らない事をしてに違たくいないたくら」

「——」  
噛んで含めるような平次の言葉に、かりそめの拵え事を言ったのを愧はじて、お文は丸い顎を襟に埋めました。

「ところで、お政は帰るとき、髪乱れか、化粧崩れを直した筈だ  
が——」

「え、その鏡台でしばらく顔を直していました」

「ギヤマンの懐中鏡ふところかがみがあつた筈だが、見せてくれないか」

「鏡台の抽斗ひきだしにありますよ」

「――」

平次は桐の枠わくに入れた小さいギヤマンの懐中鏡を取上げました。枠にも鏡にも何の変りもなく、裏を開けて見ると、水銀は少しこぼれておりますが、わざと取つたというほどではありません。いや搔き取つたにしてもほんの少しばかりだったのでしょう。

「近ごろ山口屋の主人が来るそうだが、お寿の世話でもするつもりだったのかい」

「さア――」

お文はさすがに言い渋りました。蔵前だいづうの大通と姉じょうじの情事を岡つ引の耳へなど入れたくなかったのでしょう。

「正直に言う約束じゃないか」

「それは、いろいろ仰しゃって下さるそうです」

「泊って行くような事は？」

「そんな事はございません。お酒を召上がると、いい御機嫌でお帰りになります」

「それからもう一つ訊くが、今日お政がやって来たのは、何か差迫っての事でもあったのか」

「大さらいの相談のようでした」

「来ると、いつでも、あんなにゆっくりいるのかい」

「いえ、三年に一度もいらっしやいません。珍らしい事で、姉も大変喜んでいる様子でした。近ごろ二人の仲が、何となく面白くなかったものですから——」

言いかけてお文はふと口を緘つぶみました。言つてはならぬ事に触れたと思つたのでしよう。

「有難う、あまり心配しない方がいいだろう」

平次はどつちともつかぬ事を言つて、夜更よふけの街を、神田へ歸つて来ました。



# 七

「親分、いろいろの事が解りましたよ」

ガラツ八が神田の平次の家へ飛込んで来たのは翌る朝でした。  
「鏡の事から先に話してくれ」

平次はガラツ八の饒舌おしゃべりを整理するように、こうきり出します。

「お政の懐中鏡は、水銀みずがねがピカピカついていますよ、鶺鴒うの毛ほど

の傷もない位で、——七八年前に二両二分で買ったそうだが、物  
持ちのいい女じゃありませんか」

「それから、浜名屋の又次郎はどうした」

「師匠に死なれてしよげ悄気返っていますよ。首くらいく縊り兼ねない様子で」

「嘘だろう、あんなに浮気な女共に騒がれる男は、薄情なところがあつて、容易に死ねないものだ」

「へエ」

「お前などは捨てられると死ぬ方さ、ね、八」

「そんな心持になつて見たいね、親分」

「無駄は止して、山口屋は顔を見せないか」

「金持は薄情ですね、七里けっばい潔灰で」

「涼船でお政を助けた船頭が解つたか」

「こいつは大手柄でしたよ。朝っから飛廻つてようやく突き留めました。浜町の大野屋の船頭で、喜七という——」

「あの晩通り合せてお政を助けたのか」

「それが不思議なんで、客が一人で船を出させて山口屋の船から離れないように漕こがせていたそうですよ——こんな晩は水に落ちる人があるかも知れないから気をつけてくれ、——と言ったそうで」

ガラツ八の話は怪奇にさえなります。

「その客は誰だ、解っているだろう？」

「それが解らないんで、暑いのに頬ほ冠かぶりを取らなかつたと言いま

すよ。それに、お政を水から救い上げると、すぐ姿を隠してしまつたそうで」

「フーム」

平次は唸りました。容易ならぬ企たくらみが匂います。

「船頭はいつでも来てくれる事になっていきますよ」

「それじゃ気の毒だが馬道へ伴れて行って、お葬式とむらいの支度で集っている人間の首実検をさしてくれ。その中から頬冠とむらいりで船を雇つた人間が見つかりや、占めたものだ」

「そんな事ならわけはありません、親分は？」

「横山町の唐物問屋を探して、オランダ物の直しをする家を見つ

けて来るよ」

平次の言うことは、まだガラツ八には謎でしたが、山が見えたことだけは確かのようにです。

その日の夕刻、平次は馬道のお政の家へ行きました。

「何を言やがる。つい先月、この船頭を頼んで、涼船から落されたお政を救い上げたのは又次郎だ。去年の暮に、水銀を湯呑みずがねの中ついでから見つけたのも又次郎さ、——昨夜煙草を買いに出た序ついでに、何をしたか解ったものじゃねえ、一応調べるに不思議があるものか」

漏れて来るのは、ガラツ八の大啖呵おおたんかです。

「八兄あにい哥、たいそう大きな口をきくが、こいつは又次郎の知った

こつちやないよ。又次郎は二度もお政を助けたただけだ、お政殺しかかわりにかかわり関係があるものか」

そう言うのは三輪の万七の子分のお神楽の清吉でしよう。

「関係のないのはお寿も同じことだ。とにかく俺は又次郎をしょつ引いて、訊いて見たいことがある。縄張話は後でつけようじゃないか」

ガラツ八は突つ張りました。

「八兄哥、お寿はもう白状しているんだぜ。この上、変なことをするのは無駄骨折りだ。銭形の兄哥にもそう言ってくんな。小唄ねたの師匠同士、芸の上の嫉みから、お政を殺したに相違ありません、

と、ツイ先刻申上げてしまった。お寿の外に下手人などがあるわけはねえ」

これは三輪の万七でした。

「――」

## 八

「御免よ」

その争いの真ん中へ、銭形平次は入って行きました。

「あ、親分、頬冠りの客は又次郎ですよ」

ガラツ八は部屋の隅に小さくなっている浜名屋の又次郎を指しました。

「錢形の、——俺は喧嘩を売りに来たわけじゃねえ、八兄哥あにいがお政の葬式とむらいの支度の最中へ飛込んで、又次郎を縛るの、山口屋が下手人だろうのと、無法な事を言うからツイ繩張話を持出したまでの事だ。悪く思ってくれちゃ困るぜ」

三輪の万七は静かですが、皮肉な調子でした。

「有難う、三輪の、八の野郎が何か夢でも見たんだろう。又次郎にも手落ちはあるが、下手人じゃない。山口屋などは最初から何かかわりの關係もなかったのさ」



「それ、見るがいい、八兄哥」

清吉は平次の言葉に勢いがよくなりました。

「だが、お寿にも罪はないぜ、お神楽かぐらの」

「えッ」

「下手人は思いもよらぬ人間さ。いや幽霊と言った方がいいかも知れない——可哀想にお寿は何にも知らねえ」

「そんな筈があるものか。人の仕事にケチをつけるんじゃないやあるまいな」

三輪の万七は顔色を変えました。

「最初から筋を立てて話して見よう。違ったところがあったら、

そう言つてくれ」

平次は静かに話し始めます。

「よし、聞こう」

一座は固唾かたずを呑みました。夕づいた陽は縁側に這つて、棺の前の灯あかしが次第に明るくなると、生温なまぬるい風がサツと吹いて過ぎます。

「お政は近ごろ年を取つて、芸も容貌きりようもだんだんいけなくなつて来た。人気は皆な、若くて綺麗なお寿に集るし、大事な旦那の山口屋まで、お寿ひさの方へ入り浸つてお政には切れ話を持ちかけている——。

小唄お政

お政は口惜くやしかった。居ても立つてもたまらないほどお寿が憎

かった、——お寿を一と思いに殺せば何でもないが、それでは世  
 間の人がお寿が可哀想だと言うだろうし、殺したお政は、世間の  
 憎しみを受けて、しおきだい 処刑台に昇らなければならぬ。人気稼業のお  
 政、世間からチャホヤされてきたお政には、それでは我慢が出来  
 ない。死んでも人氣は落したくなかった。——いろいろ考えた末、  
 第一番に、お寿に水銀を吞みずがねまされ損なつたと世間に言いふらそう  
 と思いついた。自分のギヤマンの懐中鏡の水銀を剥はがして、清松  
 の大さらいのとき、わざと又次郎に見つけさせるようにした——。

その証拠は、お寿の懐中鏡の水銀は傷んでいるが、わざと剥が  
 した跡はない。お政の鏡の水銀はあんまり無傷で新しい。ギヤマ

ン鏡の水銀は、とても五年と保たないものだ。不思議に思つて、江戸でたった一軒の、オランダもの和蘭物を修繕なおす家で訊くと、近ごろギヤマの懐中鏡の水銀を貼りかえたのは、お寿じゃなくてお政だった」

一座の人々は、線香臭い中に、黙つて顔を見合せました。恐ろしい沈黙の中を、平次の声だけが、低いながら凜々りんりんと響きます。

「涼船から落ちたのも、お政の狂言きょうげんだ。この時は一人ではどうにもならないので、浜名屋の又次郎にそれとなく頼んで、引揚げて貰った。——ずいぶん命がけの仕事だが、女が思い詰めると、それ位のことは何でもない——。

お寿はだんだん世間から疑われて来た。が、まだ仕上げが出来

なかつた。そこで八五郎を手なずけて、たくさんの証拠を見せ、お寿を疑わせるように仕向けさせた。が、——俺が一二日のうちに行く——と聞くと、その謀計がたくらみばれるのが怖さに、あわてて、取っておきの仕事に取りかかった——。

昨日お寿を訪ねて、顔を直す振りをして、剃刀とお寿の抜け毛を盗み出し、お寿へ無理にせがんで、途中まで送って貰った。時刻を測つて、はか暗くなるのを見越しての仕事だ。お寿と別れると、

新鳥越のかねて見定めておいた路地へ入って、左手にお寿の抜け毛を掴み、右手に持った剃刀で、自分の左の喉をほんの少し掻き切った。——いや、ほんの少し掻き切るつもりだったが、手元が

狂ったのと、小唄の師匠で、咽喉のどぶえ笛を避けたのが反って悪かった。

思わず手が滑って、深く切ったのが、あの通り急所だ」

お政は咽喉笛を避けて切ったために、自分の頸動脈けいどうみやくを切ってしまつたのでした。

「剃刀を庇ひさしへ投げ上げたのは誰だ」

三輪の万七は最後の切札を叩きつけました。

「自分の喉を切って、すぐお政が投げ出した。最初から刃物を捨てるのが大事な仕事のひとつと覚悟していたので、深傷ふかにも拘かかわらず、思わず力が入って庇の上へ投げ上げてしまった、最後の一念と言うものだろう」

誰ももう、何にも言う者はありません。

「仏の前で言うのも何かの功德くどくだろう。お政は掻き傷を拵えてお  
寿を縛らせ、一ぺんに人氣を落してやりさえすればよかったが、  
手が滑って死んだのも自業自得だ。——今じゃあの世で後悔して  
いるだろう。仏に代って、俺が懺悔ざんげしてやる。みんなお政の心得  
違いからだ、——この殺しには誰も罪はない」

平次はそう言いきると、棺の前に膝を突いて、香を捻ひねりながら  
黙禱を捧げました。

政お唄小  
誰も物を言いません。涼し過ぎる夕風が、お政の遺骸の前に  
灯ともった蠟燭ろうそくを、生命あるものの如く揺がします。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

小唄お政

初出―「オール讀物」昭和十一年七月号 文藝春秋社



底本―「錢形平次捕物全集」第三卷  
河出書房 昭和三十一年六  
月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>